

奈良県南部東部地域振興シンポジウム

平成27年9月3日(木)

・パネルディスカッション

『奥大和で幸せな暮らしに出逢う～交流から定住へ向けた各地域での取り組み～』

【パネリスト】※五十音順

梶谷 哲也 氏(黒滝村森林組合)

坂口 哲夫 氏(十津川村大字谷瀬総代)

東 寛明 氏(山添村波多野地区活性化協議会 代表)

松田 麻由子 氏(宇陀市 伊那佐郵人 局長)

【コーディネーター】

有江 正太 氏(特定非営利活動法人 空き家コンシェルジュ代表理事)

○コーディネーター(有江) はい。皆さん、改めましてこんにちは。

ただいまよりパネルディスカッションのほうに入らせていただきます。

今回、コーディネーターという大役を仰せつかりました、改めましてNPO法人空き家コンシェルジュ代表理事の有江と申します。よろしくお願いいたします。

まず初めに、簡単に私の自己紹介のほうさせていただきます。

私も両親ともに五條出身ということで、奈良県の私は大和高田市出身になります。平成25年5月に空き家コンシェルジュという空き家専門のNPOを立ち上げまして、現在、奈良県、あと各市町村の皆様と連携をとらせていただきながら、空き家所有者の方、あと利用者ですね、移住者の方のサポートということを行っている団体の代表を務めさせていただいております。今回こういった形もふなれなところもございますが、何とぞよろしくお願いいたします。

私どもの空き家コンシェルジュも任意団体として、平成23年4月に設立いたしました。くしくも大水害が起きました平成23年に私どもも活動をスタートしております。この中で奈良県南部、東部地域に甚大な被害を及ぼしましたこの紀伊半島大水害、先ほど知事のほうからもお話しございましたけれども、昨年度、集中復旧、復興期間ということで、インフラ、道路関係ですとかそういったところをあらかじめの工事のほうで完了して、先ほどありました住民の方がご自宅に戻られたと。まだ多少残ってるところはあるという

ことでしたけれども、第一歩を、大きな一歩を踏み出した形になったのかなというふうに思います。先ほどご講演いただきました中本さんのお話にもありましたけれども、本当にご苦労というのは並々ならぬものであったというふうに先ほどのお話からも感じさせていただきました。ですけれども、行政に頼らずに地元の方が率先してこういった活動を取り組みされるとということが一番重要なところだと考えております。

今回は、県の南部、東部地域を含めましたこの奥大和地域に交流や定住に向けた取り組みとしてのお話をいただく部分と、あと移住をしてこられた側としてお話しいただく部分、こういったところを今回、パネリストの皆さんには発表していただきまして、今後、奥大和のこの地域が頻繁に訪れていただける、また定住していただく、住み続けていただける、こういった地域になっていくということにはどういったことが必要なのか、現在、今どういう取り組みがされているのかということを皆さんにお話しいただければと思っております。

まず、ディスカッションの進め方なんですけれども、各パネリスト4名の皆様にお一人10分程度、ご自身のご紹介も兼ねまして現在の活動ということをお話しいただきたいと思っております。まず、地域に受け入れる側として、地域で活動されておられます東さん、坂口さんのほうにお話しいただきまして、その後に移住された側として梶谷さん、松田さんのほうにお話しいただければと思っております。

早速ではございますが、まず山添村波多野地区活性化協議会の東さんのほうからお話のほうをお願いできればと思っております。

○パネリスト（東） 皆さんこんにちは。

山添村波多野地区活性化協議会の東と申します。

通称かすがガーデンと呼んでるんですが、その取り組みについて報告をさせていただきます。

私たちのこの取り組みは平成25年9月に設立をいたしたところで、これといった成果がまだ上がっていないのにもかわりませずこうして報告をすることを本当に恥ずかしく思っておるんですが、きょう一緒にここに参加した皆さん方の活動をご自分たちの地域でも今後の活動へ生かしていきたいと、そんな思いで参加させていただいたところがございます。

まず初めに、かすがガーデンを開設するまでの歩みでございますが、私が元プロ野球の選手で阪神タイガースで活躍をされておった赤星さんがオーナーをされている少年野球の

チームと出会ったことです。このチームが毎週週末、休日、この日になったら山添村のスポーツセンターのほうのグラウンドで硬式野球の練習に京阪神方面から多くの中学生が集まってきてくれます。その赤星さんやその関係者の方から、ちょっと四、五年前になるんですが、子供たちに野球だけではなく、この自然豊かな山添村でいろいろな体験をさせたいのだと、3年間の間に子供たちが本当にこの自然豊かな山添でよかったなあと思えるような、こんなことをさせたいんだというふうな相談を受けたことから、耕作放棄地を借り受けまして農業体験が始まり、子供たちやその保護者の方との交流を始めたのがそもそものきっかけでございます。そうしておったときに、それと同時期に行政のほうから農業体験や地域に伝わっております伝統的な食の体験を通して都市住民の皆さんと交流を深めながら地域の活性化に向けた取り組みをしてはどうかというような話がありました。それならばというようなことで、特に山添村が抱えておる行政の課題であります公共施設の跡地利用、そして耕作放棄地の対策、また定住対策の取り組みができるのではないかとというふうなことで、同級生3人で地域ボランティアとして平成25年9月に開園をしたところでございます。また、山添村や県関係を初め我々と連携をする方々に指導や協力をいただきながら運営をしているところでございます。

お願いします。

この写真、スライドなんですが、この施設はかすがガーデンで山添村立の旧春日保育園で廃園となっていた施設でございます。その施設を交流の拠点として借用しております。保育園のスペースをそのまま使用いたしております。休日には自然いっぱいのかすがガーデンで過ごして、隣のおばあちゃんの手ほどきを受けながらおいしい御飯をつくり、みんなで食べて、わいわいがやがやと言いながら過ごす場所といたしております。

次、お願いします。

27年のイベント計画でございます。交流イベントは5月から始まり12月までの8回を計画しておりますが、このほかにもいろんな団体の方も受け入れております。障害者、就労支援施設の方、また専門学校生の授業でも農業体験をしてもらっております。今年のこのイベントには延べ450名の方に参加いただき、盛大に開催をしたところでございます。ことしは、この8月イベント時点で約700名の方に参加をいただいております。特に、ことしは初茶と二茶の時期にお茶に関するイベントとして茶摘みや茶もみの体験を多く取り入れております。

次、お願いします。

これは我々の交流農園での作業の様子です。収穫の喜びだけでなく、こういった除草作業も大変大切な作業でありますので、その体験をみんなですしているところでございます。

次が、交流農園でのサツマイモ掘りをしたときの様子でございます。

次、お願いします。

食の体験として、蕎麦をつくっているところでございます。これは地域に伝わる伝統的な料理の体験で、蕎麦づくりへの挑戦でございます。地域ではこの田植えの時期、またお茶刈りの時期になりますと、どの家でも早くから農作業に取りかかりまして、昼食までの間におながすいてくる。そんなとき、休憩のときに食べる蕎麦でございます。

お願いします。

これができた蕎麦でして、大豆を入れた御飯を熱いうちにフキの葉っぱで包んだ食べ物です。

次も食の体験で、アジサイサラダづくりです。交流農園で栽培したジャガイモ掘りとポテトサラダづくりです。ポテトサラダにはピンクや紫、また黄色といったいろんな色のジャガイモを使いサラダをつくっておりますが、特にこの収穫の時期がアジサイの花が咲くころですから、アジサイサラダというふうに子供たちが命名をしてくれました。

次も食の体験で、かき餅づくりの様子です。指導いただいたのは料理の達人で、このかすがガーデン近くの隣のおばちゃんに指導をいただいております。

お願いします。

これができたかき餅です。

次、お願いします。

昨年の収穫祭でのしめ縄づくりの様子です。特に、このかすがガーデン周辺の高齢者の皆さんにお集まりをいただいてしめ縄づくりにご指導をいただき、みんなでチャレンジしたところです。

お願いします。

ちょうどこの今、指導いただいている方、左側の方がかすがガーデンのほうの裏の方なんですけども、90歳の方です。その方にご指導いただいておりますし、いつも我々の活動に協力をしていただいている方でございます。

次、お願いします。

これが耕作放棄された協議会での借り受けの農地なんです。以前は見渡せばお茶畑がぐっと広がっておったんですが、現在は耕作を放棄されて荒れ放題になっております。この

今、手前の茶畑、これが協議会が借り受けました耕作放棄地であった茶畑でございます。  
我々のこの協議会ではお茶の体験のため、耕作を放棄された今、2反の茶園を借り受けて再生を目指しております。本村の農地は、高齢化と獣害によりまして耕作意欲をなくして荒れ放題となっております。そんな茶畑を再生できたらとの思いで、毎月、イベントの中でもお茶にかかわることをテーマにいたしております。この山添村を中心とした大和高原地域は、ご承知のとおり昼と夜の温度差が大きいことや山や川からの発生した霧がお茶の生育に適しているというふうなことから、古くから大和茶の産地として知られてきているところでございます。特に、このかすがガーデン付近では、県内で唯一の紅茶をつくっていたという歴史が残っているところでございます。また、今年度からは耕作を放棄された茶畑を管理して、できたお茶をオーナーになっていただいている方にお届けすると、そんなシステムも始めました。

次、お願いします。

次は、お茶づくりのコーディネーターです。このコーディネーターは、健一自然農園の茶師伊川さんをお願いいたしております。グリーンの服を着ている方なんです。無農薬で無肥料で栽培したお茶でございます。毎回この茶師の伊川さんからティータイムのときにお茶に関する話をしていただいているところでございます。

次が、茶摘みの体験です。5月には茶摘みと釜いり茶づくり、7月には和紅茶づくりに挑戦をいたしました。

お願いします。

これがお茶もみをしているところです。

次、お願いします。

次、これが釜いりをして、この作業を3回から4回繰り返して釜いり茶、それからまた和紅茶をつくり上げていくところでございます。なかなかこんな体験ができないということから、子供たちも大変喜んで参加してくれました。また、参加者からも大変好評で、お茶についての理解も深めていただいたところでございます。でき上がったお茶は、みんながティータイムのときにおいしく味わいました。

お願いします。

先ほどもちょっと紅茶の産地であったと申しましたが、かすがガーデン周辺は奈良県内で唯一の紅茶が生産されていた地域でございます。本村のお茶の歴史は大変古いんですが、大正初めから養蚕に切りかえられまして、しかし戦後にまた茶業の復興により村の主

産業となったという歴史がございます。昭和29年、60年前になりますが、森永製菓によりまして国内で紅茶の栽培地適地調査というのをされ、その結果、このかすがガーデン付近を中心とした地域が最も適した地域であるというようなことを発見されて、昭和29年に森永製菓波多野紅茶工場というのを設立されたという歴史がございます。これが当時の写真でございますが、そしてまた当時、お茶の工場で働いていた人たちの様子でございます。また、昭和33年にはイギリスで世界紅茶博覧会が開催されまして、全世界の紅茶の中からこの地で生産されたものが最優秀賞を獲得したという歴史も残っております。こうしたこともあり、お茶づくりの伝統文化を途絶えさせることなく受け継ぎたいと思っております。また、一人でも多くの方が就農移住されるように今後も活動を続けてまいりたいと思っております。

以上で山添村波多野地区活性化協議会かすがガーデンの取り組みの報告とさせていただきます。ありがとうございました。

○コーディネーター（有江） ありがとうございました。

まだ多分、お話ししたいことはたくさんあるかと思っておりますけれども、すぐ次のほうに移らせていただきます。

続きまして、十津川村谷瀬総代であります坂口さん、お願いいたします。

○パネリスト（坂口） こんにちは。

吉野郡十津川村谷瀬から来ました坂口といいます。よろしくお願ひいたします。

私が住んでる谷瀬というところは、谷瀬のつり橋というのが物すごく有名で、谷瀬は知らなくても谷瀬のつり橋は知ってるというぐらい十津川の中でも観光名所の一つです。昔の谷瀬の人は、観光客がつり橋を渡って帰っていかれる、それだけの考えしかありませんでした。ところが、最近、常会を開いたときに、これからの谷瀬どうするんだという議題が出まして、現実を直視しますと空き家はふえるわ高齢のひとり住まいの方が多いということで、このままだったら谷瀬はあかんでということで、村の協力も得て東京からNPO法人の方を招いてもらいました。それで、NPO法人の方に聞くと、まずは谷瀬の地に観光客を入れようということを提案していただきました。

次、行ってください。

それで、最初につくったのが散歩道です。この散歩道の看板は、奈良女子大の先生や生徒、奈良県立大学の先生や生徒が看板をつくってくれました。それで、谷瀬に入ってはくれたんですけど、長い間、谷瀬に滞在してくれるということはなかったもので、次に何が

あるかということで、昔、谷瀬は裏山につり橋一望できる場所あるよということで、その場所に行ってみたんですけど、長年たっておるので立木や松、杉、ヒノキがたくさん生えていて、とてもつり橋を一望できるような状態ではありませんでした。そこで、谷瀬のボランティアと大阪のコンサルの人も参加していただき、立木を伐採しました。そして、展望台をつくりました。

次、行ってください。

この展望台ですけど、ここのベンチはつり橋で修理した板を使ってベンチにしております。あの囲いは、村の協力を得て役場でつくっていただきました。

次に行ってください。

展望台までは距離が長いので、途中、ベンチをつくりました。このベンチは、谷瀬地内で伐採した杉やヒノキでつくっております。

次、行ってください。

その途中、しだれ桜を植えて、まだ小さいんですが、大きくなったら途中、見るのにいいと思ってしだれ桜をつくりました。

次、行ってください。

展望台つくったおかげで、村の協力により道の整備もしていただきました。

それで次に、私は知りませんでしたけど、年配の方に聞いたら、谷瀬には昔、5つ水車があったということを知って、それでは水車をつくろうかということで、次、行ってください。水車をつくりました。普通、水車というのは松の木でつくるのが多いんですけど、谷瀬の水車の場合は谷瀬でさっき言ったように伐採した杉とヒノキでつくっております。水車ができたことによって、ことしの4月ですけど、イベントをやるということで、ゆっくり体験ツアーというのを行いました。それで、20名程度募集したんですけど、当日は30名ぐらいになって、散歩道まで戻してください。まずは、散歩道を歩いてもらって、水車へ行ってください。水車見てもらって、展望台行ってください。展望台に上ってもらって、それで公民館行ってください、済みません。お昼には公民館で十津川高菜のめはりずし体験をしてもらいました。それで、お昼、昼食がわりにそのめはりずしを食べてもらいました。

次は、餅まき行ってください。

谷瀬には餅まき、年3回あるんですけど、その中の一つ、黒木御所の跡の餅まきを一緒にその4月のイベントで行いました。それで、餅まきの体験どうでしたと奈良市の方に

聞いてみたら、小学校で餅まきはしたんだけど、それから全然餅まきしてなくて大変おもしろかったと喜んでもらって帰っていただきました。

それで、佐田邸へ行ってください。

ことしの9月21日なんですけれど、これは村が借りてる佐田邸という家なんですけれど、ここで縁側カフェというカフェを行いたいと試験的に思っております。皆さんもよかったですら来てください。この佐田邸は、昔の谷瀬のつくりをたくさん持った佐田邸で、試験的に21日にカフェをやろうと思います。

谷瀬の取り組みとしましては、一つ一つ自分たちがやれることをこつこつとやっていて、一人でも多くの方に谷瀬に足を運んでもらおうと思っております。

以上でお話終わります。どうもありがとうございました。

○コーディネーター（有江） ありがとうございます。

すいません、大分頑張っていたいて時間がまだちょっとございますので、実際スライドをああい形で映らせていただくと本当に谷瀬に行ったような気分になってきますけども、ちょっとお聞きしたいんですけど、水車の材質というのはなぜそういうふうな形、いろんな試行錯誤があったかと思うんですけど、そういうのは何か……。

○パネリスト（坂口） 谷瀬地内の……。

○コーディネーター（有江） どうぞ、マイクのほうで。

はい。

○パネリスト（坂口） 谷瀬地内の伐採した木を利用しようということで、それであえて松の木を使わずに杉、ヒノキで水車をつくりました。

○コーディネーター（有江） 逆に、梶谷さん、どうですか、そういうところから見ますと。

○パネリスト（梶谷） やはり地元のものを使うのは当然というか、またそれを説明しないといけないと思うんですよ、来てくれた方に。これはだから普通は松だけど、地元のものを使ってるといふふうに説明するとわかってくれると思うので、そういうアプローチは大切だと思います。

○コーディネーター（有江） ありがとうございます。

特に今回、取り組みの中でありましてやはり頻りに訪れてもらうということが体験というのが非常にいいかなと思いますが、カフェなんかでは何か出される内容というのは決められていますか。



○パネリスト（坂口） 今のところ、谷瀬でつくってる高菜とか、あるいはゆうべしをちょっと刻んで食べてもらって、味がいいと思ったら帰り、つり橋茶屋で買ってもらうということを考えております。

○コーディネーター（有江） ありがとうございます。

それでは、黒滝村森林組合梶谷さん、お願いいたします。

○パネリスト（梶谷） よろしく申し上げます。

僕は東京出身です。東京出身、東京に生まれて大学卒業しまして、大学は普通の文化系の林業とは全く関係ない学校を卒業しました。それで、学生時代からとにかく田舎に住みたいという思いが強くなりまして、就職活動というのは特にしませんでした。周りの友達はみんな結構頑張って就職活動してましたけど、僕は就職活動はせずに、むしろ田舎をどこに住もうかなと探しておりました。そのときに、田舎にどこに住もうかなというときに仕事を何にするかと思ってまして、僕も本当に何も知らない学生だったので第1次産業くらいしかないのかなと勝手に思ってまして、林業、農業、漁業、その中で農業と林業を考えまして、学生時代に農家の体験とかそういうのにも行ったりしました。でも、やはりちょっと農業よりは林業のほうがおもしろそうだなというのがありまして、林業のできる田舎というのを探していました。大学4年生で学校を卒業した後、今、僕が勤めている奈良県黒滝村森林組合で作業員、現場で働く人を募集している記事があるのを知りました。それで、こちら、奈良県に来たのが17年前になります。

では次、お願いします。

これはせんとくんとヒノキの苗木を植えているところです。これ奈良県の何かCM、見たことある方いますか。県の関係の方は見てると思うんですけど、見るはずなんですけど、やはり吉野林業、木を植えていくということが大事だと思います。今回、テーマから外れるので、次行きましょう。

これは雪害です。雪の重みで崩れてしまった木の現場です。

次、お願いします。

これ同じ現場なんですよ。木を切った間伐という作業をした後の写真です。

もう一回、前へ戻ってもらっていいですか。

これがだから、次お願いします、こういうふうにきれいな山になります。僕は林業のよさというか、山の手入れをしているといっても言葉だけではなくて、こういう感覚的に本当に曲がった木とかちょっと成長が遅い木とかそういう木を切ると、こうやって真っすぐ

な木ばかり残る、こういうのが仕事してて気持ちいいし、本当にやりがいがあるというんですか、皆さん見てもはっきりわかりますもんね、違いが、やる前とやった後の。そういうやりがいのある仕事が林業だと思っています。

では次、お願いします。

最近、林業といっても大分、皆さんご存じだと思うんですけど、機械化が進んでいまして、これは山から木を引っ張り出してる、この重機についでるウインチを使って木を引っ張り出しているところです。

では次、お願いします。

これは黒滝村の山の山林なんですけども、標高で700メートルぐらいだと思うんですけど、現場に朝行ったらこういうふうな真っ白になってて、上から雪が積もったのではないんですよ。横から風と雪がばあっと吹いて、全部が真っ白になってました。こういう光景が東京に僕、住んでたら本当見れなかったと思うんですよ。本当、吉野ではなくてもこういう光景あるんでしょうけども、こういう自然の圧倒されるような感覚というのは東京にいたら味わえなかったなと思うし、東京ももちろん四季はあるんですよ、雪も降るし、結構、東京、雪降るので。でも、こういう圧倒されるような、東京だったら雪降ったら電車がとまるかそういうことばかりなので、自然に圧倒されるような体験ってなかなかないんですけども、本当に吉野に来てこういう光景見ることができて、ああ、やはり自然ってすごいなというふうに思いました。

ちなみにでも、このときの仕事は僕、枝打ちという仕事をしてたので、この木に抱きついて仕事をして、雪でびしょびしょになりました。それもまた自然の中の仕事ですよ。

次、お願いします。

これ同じ現場です。こんな感じでした。

次、お願いします。

奈良県というか、吉野で林業を始めて間伐という作業をします。僕は東京から来て、ヒノキというのは特に貴重だというふうなイメージがありました。でも、ここで林業してたら結構、切り捨て間伐というのがすごく多くて、やはり山の木もったいないなあとずっと思っていました。何かできないかな、この木を利用してとって、お箸をつくってみたりいろいろやってみました。その中でこのチェーンソーアートというチェーンソーを使って彫刻するという、そういうわざというかそういうものがあるということを知りまして、僕も始めてみました。それが吉野に来て3年目、4年目ぐらいでしょうか、10年以上、チェー

ンソーアートというのも続けています。これは和歌山の北山村の森林組合の方かな、何か村の行事の呼ばれて実演をしに行ったときの様子です。

次、お願いします。

これも同じです。僕はふだんは杉の木を使っています。杉の木でやっています。やはり材料として手に入りやすい、奈良県は特に杉、日本全国特に手に入りやすいので、あと価格が安いことも大きいです。今は本当、間伐材とか全然売り物にならによるイメージがありますけれども、こうやってちょっとチェーンソーで加工すると欲しいと言ってくれる方もふえるし、これは何の木なんですかと聞かれたら、お客さんに杉の木ですという形で説明できたりも。今、手前に熊が移ってますけど、ちょっとほら、白いところと、白太と赤身と、山、木知ってる方は皆さんご存じですけど、普通の方はやはり知らないんですよ。赤身と白太があるなんてことはもちろん全然知らないし。僕がだから背中に背割りというような、ちょっと杉の木の割れを集中させるような割れの木が、木を乾燥すると木が割れてくるので、それが余り割れないような加工をするんですけど、そうするとこれは何ですかとお客さん必ず聞いてきます。そういうときに木の説明をする。そういうことでまた、林業を身近に、山の木を身近に感じてもらえたらいいなと思ってこういう活動をしています。

では次、お願いします。

これ秋葉原です、東京の。僕は奈良県黒滝村の山の中でふだんもう誰も来ない山奥でチェーンソーアートやってるんですけども、それがいつの間にかだんだん人に知られるようになって、こうやって東京のど真ん中でも作業をするようになりました。

では次、お願いします。

これ川上村のイベントでやったときですけど、これ作品、ベンチです。フクロウのベンチをつくりました。

次、お願いします。

今ではこれ吉野町の西谷というところで、ちょうど吉野町から桜井に抜ける鹿路トンネルというのがあるんですけども、そこの麓のところで吉野チェーンソーアートスクールというのをやっています。僕はチェーンソーアートの先生、インストラクターという立場で参加していて、これもこのときは椅子をつくったんですけども、女性の方も3人ぐらい参加してくれてるのかな。大体、近畿一円、いろんな方が参加してくれます。毎月毎月第3日曜日を中心にやっていて、これまで遠方は山口県、女性の方が、山口、余りにも遠いの

で帰り運転してもらったということ、お母さんと一緒に参加した方がいました。あと、仙台。船に乗って、仙台港からフェリーに乗って名古屋まで行って、名古屋からまた車で吉野まで来てという仙台から参加してくれた方もいました。一つ山村に人を呼ぶ、ほかにはないですよ、チェーンソーアートを教えてくれる、毎月毎月定期的にやってるところは日本でここだけです。多分、世界でもここだけです。本当に年に1回ぐらいイベントするところがあります。でも、毎月毎月ずうっとやっててというのは世界中でここだけ、僕がやってるこれだけなので、やはりそういうコンテンツがあると遠方からでも来てくれます。それは自信持って言えます。

次です。

これ僕が教えてます。これ大阪の女性の方です。

次、お願いします。

これも秋葉原、これ女優さんなんですよ、僕、写ってるの。わかりますか。

○（発言する者あり）。

○パネリスト（梶谷） 正解です、中嶋さん。山の中でこうやってやってたら、いつの間にかこういう女優さんと共演することもできました。こういうことあるんですよ、本当に。

では次、行きましょう。

これちょっと吉野ではない森の中なんですけども、これ僕なんですけれども、ロープにぶら下がって、では次の写真いいですか。これも僕です。これもあるところなんですけれども、次の写真お願いします。海、これ同じところなんですけども、海が出てきました。

では、次の写真お願いします。

これ登ってるのは僕の相棒なんですけれども、つまり木の高いところに登って上から枝おろしというか、そういう高所伐採というんですか、高いところに登ってクレーンでつりながら木を切ったりとか、そういうのを皆さんちょっとイメージで見たこともある方がいると思うんですけども、僕たちの場合は自分の体をロープでつられながら、あと木とか枝も全部ロープで下に落ちないように確保しながら仕事をするようなことを今、最近やっています。それも林業、森林組合の仕事の一環としてそういったことをやっています。これもだから全部、これコウヤマキです。下にお墓があるんですよ。お墓があつて、木を伐倒できないんです。下に家ありますよねえ。急傾斜のところでもそのまま木を倒すことができないので、これ3本、木があつたんですけども、下に見えないですけど、お墓もあつて倒

せないで、枝を全て全部まずとりながら上まで上がって、今、上からちょうど崩しながら木を切って少しずつ短くしながら上からおりてるところです。

ちょっと戻ってもらっていいですか、もう一枚。

結局、これ僕は上に高い支点をとって、これでロープでつられながら、こういう感じでロープにぶら下がりながら木を切る作業をしています。これも実は小笠原諸島なんですけれども、奈良の山奥で東京出身の僕がこういう技術を黒滝村森林組合でやっていたら、世界遺産に登録されて、小笠原というのが、この小笠原固有の植物を守ってほしいということで、普通に木を伐倒したら固有の植物に当たってしまうので、木を上から少しずつ小さくして切り刻んでほしいという依頼を受けまして、小笠原で作業を毎年夏になると行っています。

では次、お願いします。もう一枚、もう一枚です。では、もう一枚お願いします。

これは高取城です。これ城壁にへばりついてるの僕なんですけれども、これもよく見たらロープで体を固定しています。これちょうど天守閣のところだと思うんですけれども、ここの草取り作業をしています。高取城は石垣しかもう残っていないので石垣が重要なんですけれども、草がすごく生えてて観光客の方からちょっとクレームがあったみたいで、3年ほど前から石垣の除草作業というのを秋に毎年やっています。今は1週ぐるっと終わりましたので、多分きれいに石垣が見えると思います。こういう山の作業というのをやっていたら、山奥でこういう作業をしていたらいろんなところへ呼ばれるようになって、小笠原とか高取城のこういう城跡の仕事とか、こういういろんな仕事を最近するようになってきました。

次、お願いします。

これです。いきなりちょっと何かと思うんですけど、これアマゾンというインターネットの書店ですけど、僕が本をちょっと書きまして、買えるんですよ、アマゾンで。これはどういう本かという、「林業の達人探訪記」と書いてありますけれども、林業のいろんな技術を持った方を取材して全国行きました。北は北海道から南は九州博多まで。日本全国いろいろ、いろんな達人ですね、のこぎりの目立ての名人だったりとか、そういう林業に関係するいろんな、川上村の方も取材しました。大きな太い木を伐倒するのが上手な方、川上村の方も1人取材しました。そういうのをまとめたものがアマゾンで売っています。もしよろしければ、また右のほうに4点在庫ありと書いてあるので、4名様、早い者勝ちなので、ぜひよろしくをお願いします。

以上です。

○コーディネーター（有江） ありがとうございます。ありがとうございます。

いい宣伝もしていただけたかと思います。

続きまして、伊那佐郵人局長の松田さんのほうからお願いいたします。

○パネリスト（松田） はい。宇陀市から来ました松田麻由子です。

プロフィールのほうお願いします。

1982年生まれです。私が生まれたのは九州の高千穂というところで、毎年夏になると生駒に当時住んでたんですけども、九州のほうに里帰りをしていました。なので、幼いころから非常に田舎にはなれ親しんでいました。その後、私は奈良高専の機械制御工学専攻を卒業しまして、2004年に結婚しています。当時22歳です。当時は郡山に住んでいたんですけども、幼いころの原体験が影響してか、将来は田舎で子育てをしたいとずっと思っていました。その願いかなって、2006年に大和郡山市から宇陀市の菟田野のほうへ移住することとなります。当時、長女が2歳、次女が6カ月でした。その後、2010年4月に長男、3人目、今5歳です、誕生しまして、2011年5月に伊那佐郵人が入っております旧伊那佐郵便局の保存活動を開始します。2012年に保存活動の末、空き家再生活用交付金のほういただくことになりまして、それで改修事業を始め、2013年4月に工事完了、5月から地域コミュニティの拠点として運営をしております。

次、お願いします。

移住、定住、交流がテーマですので、私の移住の経緯のほうをご説明したいと思いません。

まず、なぜ移住したのか。冒頭で申し上げましたとおり、動機は田舎で子育てをしたかったからです。そして、これはきっかけなんですけども、きっかけはテレワークに出会ったからです。これは生駒市にありますワイズスタッフという会社のほうで、ワイズスタッフがやっているテレワークという業種形態で契約をしております、引っ越した当時はテレワークで仕事をしておりました。なので、郡山から宇陀のほうに来てIT環境さえあれば仕事はどこにでもあるんだと当時から思っていたので、それがきっかけで田舎に移住することになります。移住に当たっての条件なんですけども、夫が今も大和郡山市のほうに勤めておりますので、通勤時間が1時間で田舎のほうを探して宇陀市になりました。なので、明日香村のほうも見に行きましたし、大和郡山市の矢田山町のほうですね、あとは天理のほうも見に行きました。なので、宇陀がよかったということではこの当時ではそうで

はなかったということになります。

次、お願いします。

移住してよかったことなんですけども、まず念願かなって田舎での子育てをスタートさせることができました。子育てにとって一番私がよかったと思う点は、まず広い家です。築60年の田舎の元農家さんのおうちを購入することができました。大きい田づくりの10LDKですか、全て和室ですけども、もちろん、おうちがあり、前庭があります。ここは道路に面していないので、庭で自由に遊ぶことができます。また、水は上水道も来てるんですけども、井戸水併用です。

次、2つ目、仕事です。まず、夏が涼しい。これは前に住んでいたところは郡山のハイツの2階だったので、宇陀に来てからの涼しさというのは本当に快適でした。そして、ライフスタイルに合った働き方ですね。IT環境がありましたのでテレワークの業種形態で、私、自分の好きな時間に仕事ができるということができました。

3つ目、遊びです。アウトドアの遊びが豊富ということで、今まで田舎にわざわざ行かないといけなかった遊びが田舎に住むことで毎日アウトドアしているようなもので、週末になったら家族みんなでバーベキューをしたり川遊びに行ったりということを繰り返しています。

次、お願いします。

移住して大変だと思うことというのをちょっと書き出させていただきました。車は、郡山に住んでいたときは1台でした、家族で。それが、最近3台になりました。2台から3台になりました。1人1台プラス軽トラで、1家庭で5人家族なんですけど、3台持っています。自治会ですね。自治会費、神社の造工、お寺の維持費、あとはミヤド、あと地域によっては頭屋と呼ぶとも思うんですけども、非常にそんな行事が多く、負担金も町なかに住んでいたときとは比べ物にならないくらい大きくなっています。時間ですね。やはり若い人、動ける人が少ないので、ことしは自治会長を仰せつかりまして、また集落営農もスタートしております。もっとも、30後半ですので消防団のほうも所属しながら、まちづくり協議会というの立ち上がりまして、そちらのほうにもかかわらせていただいております。

次、お願いします。

伊那佐郵人のご紹介を少しさせていただきます。

宇陀市の榛原、旧伊那佐村にあります築80年の旧特定郵便局を拠点にしております。

ここは伊那佐村の郵便局ということで、伊那佐山を中心とした11大字の当時、郵便局であったところです。

次、お願いします。

2014年の夏、去年の夏、国の登録有形文化財になることができました。これの評価のポイントというのは、農村地域の郵便事業の歴史を色濃く残しているということが評価されております。

次、お願いします。

中でやっている事業なんですけど、毎日お料理する方がかわる日が変わりシェフのレストランということで、雇用の場だったりちょっとチャレンジしてみたい人がここで1日シェフをするという業種形態になっています。実際にここら2組、3組ほど市内、市外で起業するに至ってます。また、子供たちが営業するという日もごくたまにですけど、あります。

次、お願いします。

私としては、郵便局だったというところを生かしているいろんな思いが交錯する場所、いろんな情報が交錯する場所として、奈良県東部の情報発信をここでどんどんしていきたいなあと思っているところです。

以上です。

○コーディネーター（有江） ありがとうございます。

私も先日お伺いさせていただきまして、すごくいい本当に雰囲気の中で充実した生活されてるんだなというのがひしひしと感じられるお話の内容でもありました。

それで、今いろいろなお話をお聞かせいただきまして、まず都市部から頻繁に奥大和の地域に訪れていただくためにどういった取り組みをされてるのか、もしくはこれからどういった取り組みをしていくのかというのが大事で、その中で消費活動によりまたつながっていけば地域の活性の一端を担えるのではないかなというふうな、お話の中でそういったところがかいま見られたというふうに思います。

次のステップとしましては、やはりその後、先ほど梶谷さん、松田さんのほうからお話しありました住み続けるというところが一番大事になってくる。これは私どものほうでもよく活動の中で続けて住んでいくというのは非常に難しいところでもあるんですけど、今お話し、発表いただきましたように住み続けられるヒントが何か今のお話でもあったのではないかなというふうに思います。とはいえ、やはりいろんな問題等がございますので、今後どのような取り組みが地域にとってまた必要なのかというところを、ちょっとお時間の



関係もありますので本当に短い時間にはなりますけども、お一人ずつお話しただけであればと思います。

まず、先ほどと順番は同じで、東さんのほうからお願いいたします。

○パネリスト（東） 今後どんな取り組みが必要になってくるのかなあとということです。ちょうど我々、活動から本当3年目を迎えたところなんです。交流を通して我々はこの新規就農者の定住ということを目的にしております、これをどのように結びつけていくのかということが今、非常に大きな課題になっております。我々この協議会の役割というのは、交流イベントを通しながら山添村のこの魅力を伝えるとともに、山添村に興味を持ってもらいたい。週末は山添というところへ足を運んでもらい、住んでみたいから住みたいというような村づくりにつなげることにあると思いますし、我々協議会は都市とこの田舎を結ぶ広報的な役割であるなあとは思っているところなわけです。

また、このことから先ほども言ってますように、行政課題の解決に向けた一つのきっかけづくりのモデルになったらいいなとも思っているところなんです。今の取り組みと申しますのは、交流体験がまず中心の事業になっております。こんなのも多くの方々に参加いただき、一人でも多くの方にこの山添村の魅力を知っていただけたかなと思っておりますし、さらに今後もこの交流の場を広げて活性化を図っていきたいと思っております。

また、この協議会は農業を目指す方に定住してもらい、本村の基幹産業であるお茶のこの伝統文化を受け継ぐために放棄茶園の再生を図っていくことにございます。そのためには、今取り組んでおります茶畑のオーナー制度というのにこれから取り組んでいきます。その1つ目として、まずお茶の生産コストの削減と自然農法による生産、管理、販売。この販売はオーナーになっていただいた方に製品を届けると。特に紅茶、それから今はやりのフレーバーティーといいますか、香りを楽しむようなお茶、そんなものをつくって、もちろん自然農法ですので無農薬、無肥料でつくっていくと、そんなことに取り組んでいきたい。

もう一つは、茶園の管理です。これ本当にお茶の管理はきついんですが、その管理の軽作業、この部分については地域の高齢者の方にお問い合わせとか、また福祉施設の方にお問い合わせして新たな雇用を生み出したいなあと、そんなにも思っております。我々のところでも今、茶業に新規就農したいというそんな研修生を今、養成をいたしております。何とかこの子が農業を山添村でできるようにしっかりと支援していききたいなと思っているところでございます。

そしてまた、移住対策の取り組み、これも村行政のほうにもお願いしなければならないんですけども、まずこの空き家の情報、また地域の情報を把握していただいたり提供していただいて、移住者がどんな暮らしをしたいのかなあと、また自治体としてのどんな支援対策があるのかなあと、そんな情報交換や発信のできる場、体制づくり、それを早急に進めていただきたいと思います。

また、この山添村というのは南部、東部地域にあって比較的便利なところなんです。それで、皆さんが余りこの危機感を持っていないのかなあと考えております。また、この行政と我々協議会だけでなく、ほかの住民さんも巻き込んで枠を超えて取り組むと、そんな組織や体制づくりを今後お願いしていただきたいと思います、そんなに思っているところです。

以上です。

○コーディネーター（有江） ありがとうございます。

まず、ちょっと受け入れ側として先に坂口さんのほうもお話をお聞きさせていただいてからご意見、移住された側のお二人からお話しいただければと思います。

坂口さん、お願いいたします。

○パネリスト（坂口） 谷瀬としましては、まず商品なんですけれど、ゆうべしと高菜のいろんなメニューができないかと、それをインターネットとかで発信して売り上げを伸ばしたいと。それと、ことし酒米を植えたので、酒米でどぶろく登録を谷瀬はしてませんので、酒屋さんのほうに酒米を卸して濁り酒という形で谷瀬ブランドとして出せたらいいなとは思っております。

それと、谷瀬は1軒借りてる家がありますので、その家に今は女子大生とか泊まっていたんですけど、女子大生とかおられないときに谷瀬をどういうところだということを経験してもらうように、これからそういう取り組みをしていこうかなとは思っております。

○コーディネーター（有江） ありがとうございます。

梶谷さん、当時、移住されたときは、先ほど東さんのほうもお話しありましたが、そういう地域の受け入れ体制というのはやはりここ、移住される前ですね、17年前から比べるとかなり変わったと思うんですが、そういうときにこういうものがあつたらもっと入りやすかったのになというようにことというのは今感じられるところではありますか。

○パネリスト（梶谷） 僕は、とにかく当時、17年前でも大分よくしていただいたというか、僕は東京にいたときには田舎暮らしに憧れていたのが古民家に住みたいと。民家

を、そういう古い築何十年、伊那佐野人さんの今の松田さんの話ではないけど、やはりそういう古民家に住みたかったんですけど、結局、新築のおうちを用意していただいて、黒滝村、あと奈良県とかに用意していただいて、そこに住みました。結局、新しい新築の家がやはり快適で、結局よかったなと思っています。家賃もすごく安い価格で貸してもらっているので。僕の場合は村でちょっと担い手がいなくて、結局、村外から募集してきたという立場だったので、村の方には、役場、森林組合、あと地元の方にすごくよくしていただいたので、僕の場合はちょっと不満もなく本当に順調に来ました。

○コーディネーター（有江） 松田さんのほうでは何か今のお話の中で特にご自身が移住された当時と比べてまたさらにこんなことがあったらいいなと思うところってありますか。

○パネリスト（松田） そうですね、私の場合は間に入ってくださった不動産屋さんのほうが地域の区長さんのところや各おうち、全戸ですね、18軒しかないんですけども、全て一緒に回っていただきました。契約を済ませる前に、この村ではこういう行事があります、ここはこういうことがあります、それでもいいですかというお話も持っていただきました。それが非常に移住するに当たってよかったなあと思っているところです。なので、私の家の場合は上水道も来てますしインフラのことも心配することありませんでしたし、築70年になりますけれども、オール電化ですし非常に快適で、特にこれがあればよかったなというのはその当時はなかったです。

○コーディネーター（有江） すごく快適にお二人暮らされてるということはすごくいいことかなと思います。

そのままちょっとすいません、梶谷さんのほう、今後の取り組みに関して簡単にちょっとお話しただければと思います。

○パネリスト（梶谷） はい。そうですね、僕の森林組合は現場で働く人が7名から8名ぐらいいるんですけども、ほぼ全員がよそ、村外から入ってきています。僕で15年、16年、17年で、古い方で20年以上で、また新しい子ですね、20代の子が去年ぐらいに3人ほどかな、2人、3人かな、入ってきまして、その子たち村外から来て黒滝村に住んで黒滝村の山の手入れをしています。なので、そういう子たちにもやはり僕みたいに長く住んでもらって仕事に充実感を感じてほしいし、けがなく、まだまだ皆さん独身なんですよ、若い子たちは。やはりこういった家庭を黒滝村で築いてほしいし、だからそういうサポートというのかな、僕一人でやるわけではないですけど、また村の行政とかもよくし

てくれてるんですけども、僕も仕事をする中でそういうサポートをとにかく若い子たちに、せっかく来て働いてくれてるので、その子たちに充実した感じを持ってもらいながら住み続けてもらいたいなと思ってるところです。

○コーディネーター（有江） ありがとうございます。

松田さん、お願いします。

○パネリスト（松田） はい。冒頭で私、宇陀でなくてもよかったんではないかと言いましたけども、これは確かにそうではあるんですけども、情報があつたかどうかというところがすごくキーポイントになると思ってます。梶谷さんが東京から黒滝村の森林組合に行かれたように、あのときもし川上村から東京へ情報発信がされていれば、川上村にこの方行かれたたかもしれないんですね。私の条件に合うのが宇陀であった、つまり情報が自分の手の届く範囲にあつたということが非常に重要だったと思ってます。今、宇陀のほうでウダカツというインターンプログラムが動いておりまして、関東から2名の学生が来ております。彼女たちも実は宇陀でなくてよかったんです。でも、関東で得られる地方の情報が宇陀しかなかったんです。宇陀で自分の希望するインターンプログラムがあつたからここまで来たんです。なので、情報発信というのは非常に非常にとても重要で、いかに人のいるところに細かい情報を欲しい人のところへ伝えるか、そこにやはり重点を置いて私自身も活動していきたいですし、県自体も努力して下さったらうれしいなと思っております。

○コーディネーター（有江） ありがとうございます。

非常に私どもも参考になる情報というところで、知ってるか知らないか、情報、そこに見えるものがあるかどうかというところだと思います。

逆に、地域として東さん、坂口さんのほうで本当、すいません、一言程度でお願いできればと思うんですけど、どういう形でこういう移住の方を受け入れる態勢をつくるために、ざっくばらんにどんな形にやはり地域に各地域としては来ていただきたいのかというところも、何か先ほどちょっとお話しありましたが、一言、二言でお願いできればと思います。

○パネリスト（東） 今、我々のところで1人、研修生を預かっているんですが、やはりその子も今まだ30歳の子なんです。大阪から来てるんです。そして、空き家をお借りして今入っておるんですけども、やはり受け入れる大字の自治会長さん、そしてまた特に山添村では難しい水道の問題とかあつたので、そういった水道の役員さん、それと地元議員

さん、そういった方が中心になって地域でいろいろお話ししてもらって、地域の方みんなが納得した上で住まわせて今もらってるんです。そして、その子にも地元のいろんな行事には積極的に参加して、地域になじむようにしていかなあかんでというようなことを今言っていて、またそうしたら地域の方も今、我々はこの農業をする人を定住させたいと思っておりますので、お茶の時期になれば週末にはお茶工場の中に入れてもらっているいろいろな教えてもらっていると、本当に地域に溶け込んできてるような状況だと思ってます。何とか山添村で第1号を出したいと思っています。

○コーディネーター（有江） さっき松田さんおっしゃっておられたように、地域のいろいろなことを一緒になって地域の方に回ってもらえるような、そういったサポートというものもそれぞれ地域もそうですし、移住者側のほうにもそういったサポートがあれば、より情報が入ってきてスムーズに地域に入っていいただけるのではないかなと思います。

坂口さん、すいません、最後になりますけども、お願いいたします。

○パネリスト（坂口） 実は、去年、村のほうに空き家登録2軒いたしまして、その2軒とも幸いなことに谷瀬に住んでいただくことになりました。一人の方は大阪の方で、一人の方は奈良市内の方なんですけれど、奈良市内の方は30代の方で、もう既に谷瀬に溶け込んでいってくれて、いろいろなイベントなんかにも参加してもらってます。そういう方を一人でも多く谷瀬のほうに住んでいただけることができたらいいなと思います。

○コーディネーター（有江） ありがとうございます。

お時間ちょっとオーバーしておりますので、ちょっと最後にまとめとしてお話しさせていただきますけども、今いろいろな話をお聞きさせていただきまして、非常に可能性というものは私どもも日々感じてますし、きょうのお話でいい情報というものもやらせていただいているんですけども、とにかく頻繁に訪れていただく、住み続けていただくためにということで今回いろいろなお話がありましたが、さまざまなまた課題というのもこれ地域によって出てくるものだと思います。きょう、行政の関係の方がたくさん来られてるということですので、そういったところを地域のほうでもきょうのお話の中でもいろいろなヒントもあろうかと思っています。こういったものを地域なりにまた今度はアレンジされながら情報を生かしていただければ、非常に今日のパネルディスカッションも意義があるものになるのではないかなと思います。

また、本日お越しいただいている方でも奥大和の地域にまだ行かれたことがない方もいらっしゃるかもしれません。一度足を運んでいただきまして実際にご自身の肌身で体験して

いただければ、よりそういったところの、今、今日のお話も実感していただけるようなところもあろうかと思えます。いろんなイベントもきょうお話もありましたので、このあたりもどんどんまた情報のほうとっていただいてご参加いただくことをまたよろしく願いいたします。

ちょうど、すいません、5分ほどオーバーになりましたけれども、本日ちょっと不慣れな形でお聞き苦しい点もあったかと思いますが、何とか終わることができましたので、すいません、皆さんどうもありがとうございました。

最後に、パネリストの4名の方に盛大な拍手をお願いいたします。